

## ヴウオン・クワン・キィ（V??ng Quan K?）とカ オダイ・カウ・コォー聖室(Thanh Th?t C?u Kho)の 形成過程

著者	津 茂
著者別名	TAKATSU Shigeru
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	203(234)-186(251)
発行年	2017-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008470/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008470/</a>

# ヴウオン・クワン・キイ (Vương Quan Kỳ) と カオダイ・カウ・コォー聖室 (Thánh Thất Cầu Kho) の 形成過程

高 津 茂

## はじめに

筆者はこれまでカオダイ教の分派についても研究を重ねてきた<sup>(1)</sup>。それはカオダイ教が仏教・道教・儒教の三教を基底に据えながらもキリスト教や精霊崇拜、時としてイスラームをも統合した<sup>(2)</sup>大道三期普度を掲げるユニバーサルな宗教を標榜しているにもかかわらず、分派を繰り返してきた歴史を抱えており、その分派の歴史過程に宗教的な「統合と分離の動機とそのプロセス」を読み取りたかったからでもある。

しかし、カオダイ教の分派理由を問う事は、その前提としてカオダイ教の総本山はタイニン派であり、タイニン派の教義理解を正統と認めることにも通じることとなる。その意味では、タイニン派の教義理解を離れた考察が求められよう。ただ、これまでの研究史がタイニン聖座中心の傾向があったことは否めないため、筆者は、ドン・タン『カオダイ教の歴史』無為編と普度編<sup>(3)</sup>や大道教理普及機関の手による『カオダイ教の歴史』第1巻・第2巻<sup>(4)</sup>さらには国家人文社会科学センター・宗教研究院『カオダイ教の初歩的考察』<sup>(5)</sup>等<sup>(6)</sup>を基礎的資料としつつもカウ・コォー・タム・クワン派の内部流通版の『カオダイ・カウ・コォー・タム・クワン聖会の略史』<sup>(7)</sup>や主としてタイニン派以外の各派の教義や歴史などを紹介している『カオダイ雑誌』掲載のホアン・ミン「カオダイ・カウ・コォー・タム・クワンの形成と発展の歴史」<sup>(8)</sup>

なども資料として使用した。

本稿が対象とするヴウオン・クワン・キイは本々はミン・ティエン派に属し<sup>(9)</sup>、カオダイ教教団創設に当たって1926年10月7日フランス植民地当局に提出されたカオダイ教の開設届に署名した28名の門弟の一人<sup>(10)</sup>であるが、タイニン派から追放され、サイゴンに戻りカウ・コォー聖室を中心に活動したためにカウ・コォー派と称された。その後のカオダイ教の統一を指向した蓮華総会 (Liên Hoà Tổng Hội)<sup>(11)</sup>の成立にも影響を及ぼし、加えて中部ヴェトナムに多くの信徒を持つカオダイ・カウ・コォー・タム・クワン聖会の創設にも寄与した人物である。

本稿ではカオダイ・カウ・コォー聖室の形成過程とともに、このヴウオン・クワン・キイの履歴を時系列に追いながらタイニン派から追放された理由や、カウ・コォー派とも称される人々の活動とその特性についても明らかにすることを目的とする。

## 1. ヴウオン・クワン・キイ (Vương Quan Kỳ (1880-1939)) 小史

ヴウオン・クワン・キイに関する資料はCQPTGLDD 1(pp.167-172)とCQPTGLDD 1(pp.420-425)にある。さらにカオダイ・バン・チン・ダオ聖会が10人の先輩を紹介する中で、その略歴を紹介<sup>(12)</sup>している。3つの資料は共に、きわめて近似性が高く、むしろ脚注に違いが見出

される。本稿では、CQPTGLDD 1の2資料を中心に時系列に整理して論述するものとする。

(1) 社会生活 ; ヴウオン・クワン・キィは、チョ・ロン (Chợ Lớn) 省の人で、ミィ・ルウオン (Mỹ Lương) の出である。1880年5月29日に生まれ、出生届は同年7月4日に出された。キィはヴウオン・クワン・ハック元帥 (Thống Chế Vương Quan Hạc) の内孫であり、外祖父は愛国的儒者であるフウイン・マン・ダット巡府 (Tuần Phủ Huỳnh Mẫn Đạt (1807-1883)) であった。キィは拳人の試験に合格し、官吏となり明命 (Minh Mạng)・嗣徳 (Tự Đức) の二朝に仕え祠官となり、1862年のフランスとの和約 (Hoà ước) にあたり署名した。

CQPTGLDD 1 (p.420) の脚注によると、「1940年4月1日発行の『大同雑誌 (Tạp Chí Đại Đồng)』11号に載ったヴウオン・クワン・キィの記事によれば、キィはヴェトナムに亡命した明の武将ズウオン・ガン・ディク (楊岸敵 Dương Ngạn Dích) の末裔である。この記事に対する脚注には後にズウオン姓をヴウオン姓に変えたと記されている。また、キィはクウオク・グウではQuanと書きながら漢字では光 (Quang) と記していた」とも記されている。

キィの両親は、ヴウオン・クワン・デエ (Vương Quan Đễ (1842-1887)) とフウイン・ティ・バァイ (Huỳnh Thị Bảy (1851-1935)) であり、キィは幼い頃1894年からミィ・トォ (Mỹ Tho) のカレッジ (College) で学び、のちにサイゴンに上り、1896年からリセ・シャッスル・ロウバ (Lycee Chasse-loup Laubat) に学び、ディプロマ (Diplome) に合格した。

1898年、氏は19歳にして南圻行政署 (sở Hành chánh Nam Kỳ) の書記 (Thư ký) となり、1898年5月18日に農務・商務局 (Direction de L'Agriculture et du Commerce) で働き始めた。南圻総督府 (Đình Thống Đốc Nam Kỳ) においては、ゴォ・ヴァン・チュウ (Ngô Văn Chiêu) と一緒に仕事をした。

1906年2月1日、ヴウオン・クワン・キィ

は、サ・デック (Sa đốc) 省の人フウイン・ゴック・ファン (1878-1949) (Huỳnh Ngọc Phan) と夫婦となった。奥方はフウイン・ロン・フウアン (Huỳnh Long Huân) とチャン・ティ・キム (Trần Thị Kim) 夫人との子であった。キィ夫妻は二人の娘を授かった。ヴウオン・タン・チ (ソフィー 1908-1980) (Vương Thanh Chi, Sophie) とヴウオン・スウアン・ハ (アンナ 1911-1983) (Vương Xuân Hà, Anna) である。1913年には、側室レエ・ティ・ドゥオック (Lê Thị Được) との間に息子ヴウオン・クワン・セン (1915-1985) をもうけている。

また、キィは1912年3月16日フランス国籍を取得し、名前をギユイローム (Guillaume) とした。

この間の南圻総督府におけるゴォ・ヴァン・チュウとの出会いと、姪ヴウオン・ティ・レエがキィのカオダイ教との出会いに大きな影響を与えたものと思われる。

(2) 信仰生活 ; ヴウオン・クワン・キィの (異母ではあるが) 次兄はヴウオン・クワン・チャン (Vương Quan Trân) であるが、ヴウオン・テェ・チャン (1863-1927) (Vương Thế Trân) と称してドォ・ティ・サン (1866-1931) (Đỗ Thị Sang) と結婚した。夫人はドォ・フウ・フウオン総督 (Tổng Đốc Đỗ Hữu Phương) の長女であり、夫婦の間には二人の子、ヴウオン・ティ・レエ (1900-1918) (Vương Thị Lễ) とヴウオン・ヒィエウ・ギィア (1905-1985) (Vương Hiếu Nghĩa) が生まれた。ヴウオン・ティ・レエは庚子の年 (1900) 1月8日に生まれ、(シャルトルの聖ポール修道院 (Nhà dòng Saint Paul de Chartres) に属している) セイント・アンファンス (Sainte Enfance) に学び、(フランスの中学校) プレヴェ・エレメンタール (Brevet Elementaire) に進んだ。しかし、ヴウオン・ティ・レエは戊午の年10月25日 (西暦1918年11月28日)、19歳にして天に帰った。筆者はレエがフランスでの生活の中でサイ・バンを覚え、帰国後にヴェトナムでも実践したのではと推測して

いる。というのは、CQPT GLDD 1, (p.424) に「ヴウオン・ティ・レエの真霊が後に第二の教えの枝別れしたもの（第二グループ）と接触をし、ドォアン・ゴック・クエの名を借りてサイ・バンを行った。」とあるからである。

さらに、同書168頁には、「姪ヴウオン・ティ・レエの真霊の引合せによって、ヴウオン・クワン・キィは1925年11月17日よりクウ (Cu), タック (Tắc), サン (Sang) 三氏のグループと一緒に教えを行い、親しい間柄であった。」とある。すなわち、クウ, タック, サン三氏のグループが第二グループを意味していると言える。

丙寅の年の大晦日 (1926年2月12日) の夜、至尊 (Chí Tôn) の門弟 (Môn đệ) の方々の集団が、お互いの家を一軒一軒訪ねた。各々の家には至尊を招き教えを降していただくために祭壇が拵えてあり、めいめいの人がある試問を与えられていた。それは至尊がヴウオン・クワン・キィに授けた一編の詩であった。

「日々新たにして、また日々新たなり

年新たに至りて、教えを新たに与ふ

労力を尽すことなく成果を得、修行を生み出しつつある

年は年を重ね、教えは最新となる」

丙寅の年3月15日、ヴウオン・クワン・キィは仙得郎君 (Tiên đắc Lang quân) 説道教師 (Thuyết đạo Giáo Sư) の職位に封じられた。

1926年4月26日、キィはタイニン聖座のヤオ・スウ (教師 Giáo Sư) に封じられた。キィはヴウオン・ティ・レエ嬢の叔父であり、彼女は最初の時期に三期普度 (Tam Kỳ Phổ Độ) の集会に参加しており、初期に教えを学んだファム・コン・タック (Phạm Công Tắc), カオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư) とカオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang) の各氏<sup>(13)</sup>を導いた瑤池宮 (Diêu Trì Cung) の七娘 (Thất Nương)<sup>(14)</sup>即ちドアン・ゴック・クウエ (Đoàn Ngọc Quế) の名を借りて、レエはサイ・バンによって指導したのだった。

すでに丙寅の年5月14日に、キィは尚派の天

封のヤオ・スウ (Thiên phong Giáo Sư phái Thượng), 即ちトゥオン・キィ・タン (Thượng Kỳ Thanh) となった。

丙寅の年10月7日 (西暦1926年11月11日) に、サイゴン人頭税務署長の資格でカオダイ教開教届の署名人28名の一人として署名した。

丙寅の年10月15日 (西暦1926年11月19日) になって、また試練が起こった。即ちヴウオン・クワン・キィの娘のヴウオン・タン・チが「体に入 (nhập xác)」られるという事件が起きた。これを「入体 (nhập thể)」の事と解せば、入門して僧侶となったということで、父キィに相談がなかったものか、意外であったものと思われるが、サック (xác) は体と言っても肉体とか脱け殻という意味で体制という意味には遠い。それゆえ、チの肉体に別の霊が入ったと解すると、どのような霊が、どうして入ったのかということから、確かに父親としては事件と考えて不思議ではない。この重大事件が、ゴ・ケン聖室 (Thánh Thất Gò Kén) でのこの開道礼 (Lễ khai Đạo) の日に引き起こされた。どちらにしろ、おそらくはこの事件のために、さらには別の理由も加わって、ヴウオン・クワン・キィは心痛の余り、新たになったばかりの教えの仕事をしだいにゆるがせにするようになったものと思われる。ちなみにヴウオン・タン・チ<sup>(15)</sup>は1908年4月28日生まれなので、当時16歳である。筆者は後者と解している。

しかし、丙寅の年11月14日 (西暦1926年12月18日) になって李師 (Đức Lý) は教えを降された。

「トゥオン・キィ・タンは教友 (Giáo Hữu) の職位に降格され、命令を遵守せずに外に出されるであろう。」

丙寅の年11月18日 (西暦1926年12月22日) 李師は諭された。「トゥオン・チュン・ニユット (Thượng Trung Nhật)<sup>(16)</sup>、賢友 (Hiền hữu) は六省の幾つかの聖室に詩を書き、トゥオン・キィ・タンは追放され、門弟の身分から外されるか、少なくとも教えを伝える権力を失うと述

べた。このように全く言うことを聞かないと思われると、仲間に近い邪教 (Tà đạo) として罰せられることになるのです、分かりましたね。法律を制定し、それによりどうしたいのか、以前はそうに (むだなことを) していたが、罪業を免れるためには天の条項 (Thiên điều) が破られることを避け、護法賢友 (Hộ Pháp Hiền hữu) が心を安んずることができるようにしなければならぬ。」

丙寅の年11月28日 (西暦1927年1月1日) 李師が教えを降された。

「トゥオン・チュン・ニュット、賢友はこれからトゥオン・キィ・タンをこれまでのように門弟のようにみなして扱い、諸職にある教友もまたそうしなさい。この師の許しを求める言葉のために、許しを与えるためには教えの法が犯される事となった。」

1930年になり、ヤオ・スウ (教師) トゥオン・キィ・タン即ちヴウオン・クワン・キィは、新たに儀礼に適用するタイニン聖座の命令に従わず、分かれて派を立て、同派はカウ・コォー聖室に置かれた。

それ以前では、1924年になり、ゴォ・ヴァン・チュウと総督府交易室で一緒に仕事をしており、ゴォ・ヴァン・チュウとは同窓生であった。しかしゴォ・ヴァン・チュウ氏が分かれてチュウ・ミン派 (phái Chiêu Minh) を立てた時から、ヴウオン・クワン・キィは寂しく、祖亭 (儀礼の中心となる廟) (Tổ Đình), すなわちタイニン聖座の位置を決める教えの仕事が揺るがせになった。この理由のために、李師は追放したのではなかろうか。極めて政治的な聖言である。

壬申の年 (1932) 7月24日、キィはミィ・トォのミン・チョン・リィ聖会のトゥオン・フォイ・スウ (尚配師) の品に封ぜられた。また、キィはカオダイ・カウ・コォー・タム・クワンの創設にあつて先輩職色として、中部ヴェトナムへの伝道に功績があった。

ヴウオン・クワン・キィは己卯 (Kỷ Mão) の年 (1939) 10月18日、天に帰りタン・ソン・

ニィ (Tân Sơn Nhì) に埋葬された。葬礼の日、グウエン・ゴック・トォ (Nguyễn Ngọc Thơ), ドアン・ヴァン・バン (1876-1941) (Đoàn Văn Bản)<sup>(17)</sup> の各氏が哀悼と送別の辞を読んだ。現在、氏の遺灰はジャ・ディン (Gia Định) のビン・ホア聖室 (Thánh Thất Bình Hoà) に留められている。

以上のことから、以下の点が知れる。

- i. ヴウオン・クワン・キィは名門に生まれ、当時の上流階級に育ち、フランス式の教育を受け、総督府に高級官僚として勤めたエリートであった。
- ii. ゴォ・ヴァン・チュウからカオダイの神への信仰を勧められたが、姪のヴウオン・ティ・レェの紹介からカオダイ教第二グループに入りサイ・バンの仲間と親しくなった。
- iii. サイゴン税務署長として、カオダイ教団開設届の署名人28名の一人として署名した。
- iv. 霊が愛娘チの「体に入 (nhập xác)」られるという重大事件がきっかけで、心痛の余りタイニン派の教えの仕事に身が入らなくなり、追放の一因となる。
- v. 李教宗に許されたが、新たな儀礼に適用するタイニン聖座の命令に従わず、分かれてカウ・コォー派を立てた。
- vi. ミン・チョン・リィ聖会のトゥオン・フォイ・スウ (尚配師) の品に封ぜられるとともに、キィはカオダイ・カウ・コォー・タム・クワンの創設にあつて中部ヴェトナムへの伝道に功績があった。

## 2. サイゴンにおけるカウ・コォー派

VNCTG 1995, (p.134) によると、「サイゴンにおけるカウ・コォー派 (Phái Cầu Kho) は、ヴウオン・クワン・キィ (Vương Quan Kỳ), ドアン・ヴァン・バン (Đoàn Văn Bản), チャン・ヴァン・クウエ (Trần Văn Quế) により1928年に入って主張された。」とあり、この壇機 (Đàn cơ) はもともとゴォ・ヴァン・チュウ (Ngô Văn Chiêu) によって立てられ、1924年から存



在したものが、分かれたものである。ここはタイニン聖座に集まっていた時も、分かれていた時も途切れることなく活動を続けている壇機 (Đàn cơ) の一つである。この派の基本的特徴は、独立への自発性と、途切れることのない道教 (Đạo Giáo) の精神を持っていることであり、より優れている点は、各壇機の間有機的な組織的つながりを持っている点にある。」と指導層と前史と概括的な性格のみを記している。それに比し、ドン・タン (1972), (pp.389-390) は、「カウ・コォー派 (Phái Cầu Kho) (1930...) は、およそ1930年頃、ヤオ・スウであったヴウオン・クワン・キイ、ドアン・ヴァン・バン、フウイン・チュン・トゥク (Huỳnh Trung Túc), チャン・トイ (Trần Thời) のような方々、ヤオ・フウ (Giáo hữu 教友) であったグウエン・ヴァン・トゥオン (1887-1939) (Nguyễn Văn Tường)<sup>(18)</sup>、チャン・クワン・ミン (Trần Quang Minh), グウエン・ヴァン・カイ (Nguyễn Văn Khai), グウエン・ヴァン・クウエン (Nguyễn Văn Quyển), ハ・ヴァン・ルウオン (Hà Văn Lương) のような方々、レ・サン (Lễ sanh 礼生) であったチャン・ヴァン・タン (Trần Văn Tân), チャン・ヴァン・クエ (Trần Văn Quế), グウエン・ヴァン・フウ (Nguyễn Văn Phùng), ルウオン・ヴァン・ボイ (Lương Văn Bồi), ファン・チュン・マン (Phan Trường Mạnh) のような方々、それにチュオン・ケエ・アン (Trương Kế An), ファン・チュオン・トォ (Phan Trường Thọ), グウエン・ゴック・ドイ (Nguyễn Ngọc Đồi), レ・ティエン・ロック (Lê Thiện Lộc) のような方々をはじめとするカウ・コォー聖室の諸職色 (Chức sắc) がタイニン聖座 (Toà Thánh Tây Ninh) と政治的意見を異にするようになった。」と記し、指導層のみならず、当時のタイニン聖座の運営に異を唱えた職色達の位階と名前を記している。これはサイゴンのカオダイ知識人の多くが離反したものであり、教団創設直後の危機の一つであった。その上で「政治的意見を異にする」という異の内容を、「越

権行為を犯し財政もハッキリしない」とドン・タンは断じているが、具体性に乏しい。ただ、ドン・タンの使用している資料がチャウ・チ (Châu Tri) である点で興味深い。すなわち、タイニンにおける命令を遵守せずに分裂してサイゴンに戻って独立した。これにより、カウ・コォー・グループ (nhóm Cầu Kho) の芽が出たのであると成立事情を説明するとともに、「1930年11月17日のチャウ・チ (Châu Tri) 第358号の中で、レ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung) が、タイニン聖座掌管 (Chương quản) の名において、カウ・コォー聖室管理委員会会長の座を教友 (Giáo hữu) ゴック・ミン・タン (Ngọc Minh Thanh) に委任する」と記述している。さらに加えて、「1930年11月14日、賢友ゴック・ミン・タンが『大壇小壇儀礼 (Nghị Tiết Đại Đàn Tiểu Đàn)』について述べた手紙を私 (チュン) は持っている。」として、以下の様に解説している。

「その手紙の中で、賢友ゴック・ミン・タンはカウ・コォー派の人たちは文章に明るく見直す知識を持っているため、カウ・コォーのホ (戸 họ) は聖座が下し与えた『聖座儀礼 (Nghị Tiết Toà Thánh)』書中の儀礼に従って儀式祭典を執り行うことはできないと述べている。もし教えのホの指導者の諸賢友や聖室の主人の諸賢友が、聖座の公布施行した各事を実行しなかったなら、教えは一つの根源を持たなくなってしまう。教えが成らなければ、誰もが優越感を持ち自ら尊大ぶり、誰もが自分のみの意のままに美しい花と見倣してろくでもない事を考え出すでしょう。聖座が公布施行したことがいくらかも実行されないということは、神の命でなく真っ先に有罪とされねばなりません。私は聖座についての知識を持った聡明な誰かが、才気と知恵を持って教えを助け衆生を助ける手伝いをしてくれる事を切に願います。また、更に世の中の事を誰が統括して意見を捧げてくれるのだろうか。長い間、至尊 (Chí Tôn) が私を呼び寄せられて、おっしゃられた。

「チュン (Trung) よ! 私を敬い怖れる以上に仲間を傷付ける事を怖れる者のせいで、新たに現世の独占権を得て覇を唱え、侯を称する者が居ることがつらい。宗務行政はどのような状況にあっても一つの規定によらねばならないが、ところが聖室はそのようではない。私が決して認めないのは、三期 (Tam Kỳ) の教えの場が出現することであり、そのようになった時には汝らが自分で考え直しなさい。」とあり、教宗レ・ヴァン・チュンの自己弁護と正当化が述べられていて、分派理由の一つである、新たに適應されたタイニン聖座の儀礼なるものが『大壇小壇儀礼』のことで知れるのみである。結局このチャウ・チでの懐柔は成功せず、不和と離脱が決定的となった。すなわち、「その不和の中で、もともとはカオダイ教の最初の聖室であるカウ・コォー聖室は、教えを行うのと同じように宗務行政の方面についてもタイニン聖座を離脱して独立した。指導者は、1926年4月26日天の封じたザオ・スウであったクワン・フウ (官夫 quan phủ) ヴウオン・クワン・キィであった。しかしながら、このグループは教えの一派として独立したことを主張することがなく、ただタイニン聖座におけるレ・ヴァン・チュンやファム・コン・タックらの足跡を受け入れない目的だけのためでしかなかったの、サイゴン市の範囲外には広く機構を発展させることはなかった。それゆえ、各氏が順々に死んでしまうと、カウ・コォー聖室も完全に大いなる教え (Đại Đạo) の領域を失ってしまった。」と記している。しかしながら、そうだろうか。後述するカオダイ・カウ・コォー・タム・クワン聖会の看板にはカオダイ・カウ・コォー聖会と記されており、筆者は継承されているものと考え。ただし、現在のカオダイ教諸派の中でも教義内容を聖典として公開しているのは、タイニン派以外にはチュウ・ミン・ヴォ・ヴィ派の『大乘真教経 (Kinh Tam Thừa Chơn Giáo)』だけであり、「大いなる教え」の理解に大きなずれ

があることが最大の分離理由かとも思う。その意味では、ドン・タンは、カウ・コォー派とカウ・コォー・タム・クワン聖会の連続性を認めることなく、はっきりと分けて認識している。それゆえ、「この後、中立的道友グループの指導者ファン・タン (Phan Thanh) がカウ・コォー聖室の後身を再建しようと主唱した。現在、サイゴン市のグエン・ク・チン (Nguyễn Cư Trinh) 大路224-226にあるナム・タン聖室 (Thánh Thất Nam Thành) がそれである。」としているのは、その証左と言えよう。

それに対して、CQPTGLDD 2. (pp393-397) はカウ・コォー聖室の側の資料を用いて記述している。すなわち、「カウ・コォー聖室の各道友 (Đạo Hữu) はサイゴンに戻った。1928-1929年から、聖座における各職色・職事 (chức sắc chức việc) の内部で、①財政について、②礼経 (lễ) について、③組織について、④管理について、等の討議が徐々に広がっていった。そのお互いに異なった多くの意見が普通ではありえなくなり大きな問題となった。そのようなことが出現した背景には、以前から指摘されていた密かな原因がそれぞれあった。この「見かけの (biểu kiến)」原因はカウ・コォー聖室の各道友が聖座を出るときに高く掲げたものであった。」として具体的な4つの問題点とその見かけの原因を次のように示している。

「1926年10月15日、ゴ・ケン寺 (chùa Gò Kén) で天の教え (Đạo Trời) が姿を表す礼日の後で、特に旧い三宝 (Tam Bửu cũ) を奏上する三牌 (ba bài) を新たな三宝を奏上する三牌に変更した後、タイニン聖座にあって全く逆の考えがまかり通った時であった。多くの事柄について、中でも財政について、タイニン聖座における天の封じた大いなる方々 (chư Đại Thiên Phong) と意見が同じでなかったために、カウ・コォー聖室における諸道友は何度も諫言したが修復することはできず、ついには分岐し、タイニン聖座と一緒に事を成すことはなかった。」(タイプ打ちの『カオダイ十二門徒小史 (Tiểu

Sử Thập nhị đồ đệ Đức Cao Đài)』中の「ドアン・ヴァン・バン 師小史 (tiểu sử Ngài Đoàn Văn Bán)」21頁に記されているフエ・ルウオン道長 (Đạo trưởng Huệ Lương) の言葉。

上述した三宝を捧げる三牌經 (ba bài kinh) を変更する部分についてだけいえば、以下4章で触れる。

幾度となく「諫言」した後、フエ・ルウオン道長が言及したように、おそらくは「最後の干諫 (can gián cuối cùng)」が行われたのは1931年2月22日、カウ・コォーの道友がタイニン聖座に次の施行停止10ヶ条を送った時と思われる。

- ① 三教の座 (Toà Tam Giáo) を設けることはおやめ下さい。
  - ② 衆生 (nhơn sanh) の金を取り証文を発行することは取りやめねばなりません。
  - ③ 衆生を冷遇したり、蔑んだりしてはいけません。
  - ④ 如眼 (Như Nhân), 3ヤオ・スウ (教師) と16教友を承認しないチャウ・チ (Châu tri) はお取り消し下さい。
  - ⑤ 新たな三宝の三牌をおやめ下さい。
  - ⑥ 聖座 (Toà Thánh) の外に印刷所を移さねばなりません。
  - ⑦ 聖座の中に商売をする家を設けてはいけません。
  - ⑧ 機筆 (cơ bút) を一時的に停止するという大慈父 (Đại Từ Phụ) の命令を遵守し、丁卯 (Đinh Mão) の年6月から現在 (1931年2月22日) までの聖言 (Thánh Ngôn) を廃止して下さい。
  - ⑨ タイ・ト・タン (Thái Thơ Thanh) 氏が聖会 (Hội Thánh) の権力をほしいままにすることはできないようにして下さい。
  - ⑩ [チャン・クワン・ギィエム (Trần Quang Nghiêm) 氏の要求の言葉] あれをお願いします。
- サイゴン, 1931年2月22日 敬具  
記名: 4教友 (Giáo Hữu)・5道友 (Đạo Hữu)」<sup>(19)</sup>  
上記の10項目の「最後の干諫」を裏返して読

めば、密かな原因の内容の適否は定かでないものの、カウ・コォー聖室に集う諸道友の不信とそれに基づく離反理由は明らかである。加えて、CQPTGLDD2では、「この時点での聖座にある各文書の研究によると、1928年4月28日の集会に背いているという結論であり、ほとんどの文書の最後にはカウ・コォー聖室の各道友、具体的にはレエ・ヴァン・ジャン (Lê Văn Giảng), グウエン・ヴァン・ライ (Nguyễn Văn Lai), レエ・ヴァン・サン (Lê Văn Sanh), チャン・クワン・ミン (Trần Quang Minh), トゥエット・タン・タン (Tuyết Tấn Thành), グウエン・ヴァン・フン (Nguyễn Văn Phụng)・・・の各氏の署名があった。」と記されている。ここで言う1928年4月28日の集会の合意事項がいかなるものかは不詳である。また、ほとんどの文書に署名している者がカウ・コォー派の道友であるという事は、宗務運営上の担当者であるサイゴンのカオダイ知識人がカウ・コォー聖室に属していたことの証左ともいえよう。ただ、CQPTGLDD 2に、「はっきりと言う必要があることは、タイニン聖座にいた少なからざる各位はカウ・コォー聖室に引き籠って以前のように教えを行っており、これ以前の多くの書がいわゆる「カウ・コォー派」(phái Cầu Kho) と称しているにもかかわらず、これまでに離れて一支派を立てたいと望んだ事がないということである。」と記されていることから、分離独立の意向は余り盛んであったというわけではなく、むしろ無視・追放された、あるいはそれに近い状況であったことが推察される。その意味では積極的に分離独立した様子は見られない。むしろCQPTGLDD 2の脚注に見られるように、「支派を分け隔てない立場で、内部の融合という観点から普遍的に意見を言う場を創り、大同雑誌 (Tạp Chí Đại Đồng) や蓮華総会・・・のような各機関をカウ・コォー聖室は支援した。他にも、私たちの意見に従って、正式に一つの支派と称されるためには次の二つの要素を満たしていなければならないとした。すなわち、一



つには、独自の職色 (chức sắc) 系統を持った独立した聖会 (Hội Thánh) [正式な機関の所在地となる聖座がある] であるということ。二つには、この聖会が大同三期普度 (Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ) の宗旨と目的に従って活動しなければならないということである。」と記されていることから、カウ・コォー聖室の道友たちは、普遍的に意見を言える場を求めて、教えの統一を指向していた点に、その特徴を見て取ることができるものと思う。この特徴は CQPTGLDD 2. (p.393) の次の記述からも確認できよう。「フエ・ルウオン道長 (Đạo trưởng Huệ Lương) は、教理普及機関 (Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý) において諸道友に常に次の様な話を述べておられた。

「ある時、タイニン聖座に上ったばかりのトゥオン・チュン・ニュット (Thượng Trung Nhựt) 師がカウ・コォー聖室を訪ねられた。その時、タイニン聖座とカウ・コォーの諸職色との間には、財政に関してお互いに誤解があった。その時のカウ・コォー聖室の各要人はドアン・ヴァン・バン、ヴウオン・クワン・キィ、チャン・クワン・ミン、ヴォー・ヴァン・トゥオン (Võ Văn Tường), フウイン・チュン・トゥアット (Huỳnh Trung Tuất), グウエン・ファット・チュック (Nguyễn Phát Trưốc), [自目寺 (tự Tư Mắt)] 等々・・・であった。この各位は、この機会にかなり重大な言葉でトゥオン・ダウ・スウ (尚頭師 Thượng Đầu Sư) を責め立て始めた。トゥオン・ダウ・スウは大変に怒った様子をするかと思いきや代わりに、「みなさん言い過ぎですね。」とゆっくりと言っただけで、続いて翁はすこやかにいびきをかいて熟睡した。」フエ・ルウオン道長はトゥオン・チュン・ニュット師のさっぱりした無欲な、優しいゆったりとした性情を称賛したくて、上述したように自分の事も逐一検証して言ったのだが、そのために聖室の職色とカウ・コォー聖室の職色との間には完全な断絶はないと、我々は認識してしまった。」と記している。さらに、対立や追放といった言

葉の上でのまがまがしさとは遠く、人間関係は穏やかであった。すなわち、CQPTGLDD 2. (p.397) の脚注に、「(カウ・コォー聖室のグウエン・ヴァン・フン翁の娘である) グウエン・ティ・ホン (Nguyễn Thị Hồng) の言葉によれば、1950年、(聖座を「諫言」した10条の中でまで繰り返された人物) タイ・トォ・タン (Thái Thơ Thanh) 頭師が災難にあい、(フー・ラム (Phú Lâm), バ・ケ通り (đường Bà Kế), 白雲庵 (Bạch Vân Am)) 私邸で教えの悟りを開いた時、カウ・コォーで諸位とともに危険をも顧みなかったグウエン・ヴァン・フンは、(カウ・コォーが再建した) ナム・タン聖室 (Nam Thành Thánh Thất) にて翁の行為を盛大に迎え7日間周到に葬礼を行った。その後にタイ・トォ・タンを伴ってタイニン聖座に入塔した。」とあるからである。

### 3. 第二グループについて

上述したヴウオン・クワン・キィ小史の中で、姪レエの紹介でキィが第二グループの成員となった旨記したが、この第二グループとはどのような意味で第二であるのかについて触れておきたい。

CQPTGLDD 1 (pp.167-170) の「教えの体制の形成 — 二つの起源を持つ教えを和やかに一緒にするように運ぶ —」に、

「カオダイの神が出現し、信仰基盤が成長してきた後、お互いに二つの堅固な基礎から乙丑の年 (1925) の末までに、二つの起源を持つ第一と第二の教えの脈 (ここではしばらくの間第一グループ (Nhánh Một) と第二グループと称させていただきます) は、恩上 (Ơn Trên) によって和やかに一緒にするように運ばれた。」とあり、次いで最初の接触時期として、「まず第一にヴウオン・クワン・キィに言及する。ヴウオン・クワン・キィは、ゴォ・ヴァン・チェウより2歳若い。二人は共にシャッスル・ロウバ校に学び、県の長官の枠に合格し県知事に上り、1924-1925年の間には南圻総督府商務局と一緒に仕事をした。このようなことから、二人

は同窓生とも言い得る友人であった。『官夫  
ゴォ・ヴァン・チェウの歴史』の35頁の中で、  
「サイゴンにおいて、ゴォ・ヴァン・チェウが  
最初に会ったのはヴウオン・クワン・キイで  
あり、キイとは意気のあった同窓の友であった。  
ゴォ・ヴァン・チェウ氏はキイ氏に心を修行し  
性格を養い、カオダイの神を拝むよう初めて忠  
告した。」とある。」と述べ小史の記述を追認し  
ている。さらに、「別の側から言うと、1925年  
の末になって、ヴウオン・クワン・キイはサイ  
・バン (xây bản) の時に新たに生き返った  
(ドォアン・ゴック・クエ = 瑤池宮七娘) ヴウ  
オン・ティ・レ嬢の真霊の紹介により第二グ  
ループの正式な成員となっていた。1926年の初  
めに、カオダイの神は第二グループに天眼  
(Thiên Nhân) を拝むよう諭されたが、キイは  
実行はしたものの、未だその意義を理解せず、  
心の中ではまだ疑問を持っていた。この当時、  
ヴウオン・クワン・キイは親友ゴォ・ヴァン・  
チェウ氏がカオダイの神に従って修行をしてお  
り、天眼を拝んでいることも知っていた。しか  
し、だからと言ってヴウオン・クワン・キイ  
氏が仏道に入るとかゴォ氏の修行方法に習うと  
いうようなことはなかった。ただゴォ・ヴァン・  
チェウの外には極めて寡黙で、感情を露わにせ  
ず、世間の人々とほとんど交渉を持たない生活  
をしているのみであった。ヴウオン・クワン・  
キイはこの事を説明し、グループ内部で意見を  
交換して論じていたが、直ちにゴォ・ヴァン・  
チェウ氏と接触したいとまでは望んでおらず、  
ゴォ氏の修行方法に加えるべきものをゆっくり  
とした時間の中で理解するために自らの道に従  
うつもりであった。」と述べられており、第二  
グループがサイ・バンにより神意を伺う「外教  
公伝」<sup>(20)</sup>を意味していることが知れる。この内  
教心伝と外教公伝の統一が以下の神意でなされ  
たことが次の記述から知れる。「1926年1月22  
日夜、まさにこの時点で、(後のカウ・コォー  
聖室の) ドォアン・ヴァン・バン校長 (Độc  
Học Đoàn Văn Bản) の家で、カオダイの神が決

定された言葉が手渡された。

「キイ、チュン、バン、クウ、タックは、教  
えを聴きなさい。

組織を回復させる一面、二つに切断すること  
になると思う。

カオダイの神がお知りになったら痛ましく思  
われよう。

弟子も、門弟達とて同様である。分かれたい  
という気持ちは誰のためかを考えなさい。

キイよ、師は各弟子達がお互いに愛好しあい、  
お互いに和やかに一緒になって欲しいと思っ  
ている。この思いを聞き届け、従いなさい。

師はチェウにも言おう、[キイとチェウの]  
二人の弟子はこれに従いなさい。」

ダウ・スウ (頭師) タイ・トォ・タンが束ね  
て、後世に伝えた聖なる教えの幾つかの原本を  
含む『年数時設録』からの引用をCQPTGLDD  
2で記載している。

これは第一・第二グループ両派の各門弟に対  
し、お互いに「和やかに一緒になりなさい」そ  
して「聞き入れて従わ」ねばならないという命  
令である。それゆえ、カオダイの命令に従って  
執行するためにヴウオン・クワン・キイはカ  
オ・クウイン・クウ、ファミ・コン・タック、  
レェ・ヴァン・チュン、ドォアン・ヴァン・バ  
ン…の諸位を指導し、ゴォ・ヴァン・チェウと  
顔合わせをした。当時ゴォ師はちょうどサイゴ  
ンの第1郡、今のレェ・ロイ通りに当るボナード  
通り110番の2階に住んでいた。

このカオダイの神の教えは、当時のものである  
とともに、永遠のものである。当時の人事を  
列挙しておく、

第一グループ；ゴォ・ヴァン・チェウ、グウエ  
ン・ヴァン・ホアイ、ヴォ・ヴァン・サン、リイ・  
チョン・クイ、…

第二グループ；カオ・クウイン・クウ、ファミ・  
コン・タック、カオ・ホアイ・サン、レェ・ヴァ  
ン・チュン、グウエン・チュン・ハウ、ドォア  
ン・ヴァン・バン、ヴウオン・クワン・キイ、  
…

である。

以上より明らかなように、カオダイ教団開教の前に、第一グループ＝内教心伝と第二グループ＝外教公伝の統一は、カオダイの神の命においてなされ、両派の統合を実行したのがヴウオン・クワン・キィであった。その意味では、キィはカオダイ教の統合の代表であると知れる。

#### 4. 聖座と各地の聖室における大壇と小壇儀礼の統一について

上述したタイニン聖座からの離反理由の一つに『大壇小壇儀礼』の強要があった。この儀礼書のどのような部分が離反理由となったのかを検討するに、CQPTGLDD 2 (pp.176-178) に、「聖座と各地の聖室における大壇と小壇儀礼 (Nghi tiết Đại đàn và Tiểu đàn tại Toà Thánh và Thánh Thất các nơi)」との記述がある。些か長いが引用すると、

「実際は、新たに開かれた教えの普度公伝の時1926年の初めから、その後すでに聖座や地方の聖室では、普度 (Phổ Độ) の各壇においては経を供え儀式を執り行っており、恩上 (Ơn Trên) は、1日ごとに完全に整うように補うように教えられた。

1928年になって、聖会が「四時日誦経 (Tứ Thời Nhật tụng Kinh)」を發布した後、毎日誦える経としては比較的に穏やかであり、なお (ゴォ・ヴァン・チュウ師の伝来による) 三宝 (Tam Bửu) に捧げる三牌についてだけ、変更しなければならないと若干の職色は考えていた。ちょうどティエップ・レェ・ニャック・クワン (接礼楽君, Tiếp Lễ Nhạc Quân) の責務を担っていたカォ・クウイン・ズィエウ (Cao Quỳnh Diêu) は己子 (1929年, Kỷ Tỵ) の年の初めに、新たな三宝を捧げる三牌を編纂して聖会にうやうやしく提出した。己子の年(1929年) 5月15日、タイニン聖座において、尊師は、口を浄め、心を浄め、身を浄めて、産土神 (Thổ Địa) に願い求める・・・各呪牌を廃止するために、三宝を捧げる三牌を修正するよう降され

た。

翌年、甲午 (1930年, Canh Ngọ) の年6月17日、聖会は「聖座と各地の聖室における大壇と小壇儀礼」を發布した。巻頭にはチャウ・チィ (Châu tri) の言葉があり、原文は次の通りである。「聖座, 甲午の年6月(1930年7月12日) チャウ・チィ

諸賢友 (chư Hiền Hữu), 諸聖室, ダウ・ホ (頭戸 Đầu Hộ) と九重台 (Cửu Trùng Đài) の職色に送る。愛すべき賢い友よ、護法 (Hộ Pháp) は私のために至尊 (Chí Tôn) に供える本礼 (bản lễ) を送り、協天台 (Hiệp Thiên Đài) の三教 (Tam Giáo) は以下のようにそっくりに似せて編纂した。「1930年2月9日、至尊の誕生日 (ngày Vía) の後、私は検討会議を設置し、この『本礼』に照らして發布することを問うたところ、あらゆる方が皆同意した。

このことから、諸賢友はこのことに照らさざるをえず、両派の道友に儀式と儀式方法を教えた。」教えは正しい理であり、正しい理は一つであり、教えの儀式方法も一つをよりどころにしなければならないとしただけである。これ以降、儀式を知らない道友がなおいたとしても、教友、礼生 (Lễ Sanh), 正副知事 (Chánh Phó Trị Sự) や通事 (Thông Sự) に関する誤りがあった時には、どのようなホ (họ) もまさにそのホに従うこととする。 敬具

トゥオン頭師 トゥオン・チュン・ニュット」

1930年末から、聖座に直属する各聖室はこの儀礼書に従って儀式を行った。すなわち、大壇の時に注ぐべき各課題がまだないにもかかわらず、三牌を使用して (慈悲を使いこなし (Từ bi giá ngự・・・)) 新しい三宝を奉じる経を読み始めた。その後玉隍経 (Ngọc Hoàng Kinh) や三教道祖称頌経 (Kinh xưng tụng Tam Giáo Đạo Tổ) を誦えた。」とある。このトゥオン・チュン・ニュットが署名した1930年7月12日のチャウ・チィは、護法ファム・コン・タックが『本礼 (bản lễ)』によって協天台 (Hiệp Thiên Đài) の三教 (Tam Giáo) に似せて編纂させたとも解

されることを明らかにしている。

もともと保文法君 (Bảo Văn Pháp Quân) カオ・ティン・ズィウ (Cao Quỳnh Diêu) により編纂され、護法 (Hộ Pháp) ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) により上程され、既にタイニン聖座カオダイ聖会クウ・チュン・ダイ (九重台Cửu Trung Đài) に提出され、教宗 (Giáo Tông) レ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung) が全道で統一して使用するために1930年7月12日からの施行を發布したのがタイニン聖座カオダイ聖会の刊行した『大壇小壇儀礼 (Nghị Tiết Đại Đàn Tiểu Đàn)』である。筆者はタイニン聖座の指導権を握る第二グループ=外教公伝による第一グループ=内教心伝の教えの実践に当たっての儀礼の統合化の強要がヴウオン・クワン・キイを初めとするカウ・コォー派の離反を招来したと考えている。

## 5. カウ・コォー・タム・クワン聖会

「ホアン・ミン」によると、カウ・コォー・タム・クワン聖会 (Hội Thánh Cầu Kho Tam Quan) は「1960年にビン・ディン (Bình Định) 省タム・クワン市鎮にカウ・コォー聖座 (Toà thánh Cầu Kho) を有して成立した。」とあるが、PBHでも『略史』でも確認できない。カウ・コォー・タム・クワン聖会とカウ・コォー派とを分けて考えることは、カウ・コォー派が後にその近くの新たな土地に移り、そこにナム・タン聖室 (Thánh Thất Nam Thành) を建て、同派を継承したとの考えに通じる。ナム・タン聖室は現在ホー・チ・ミン市第1郡グウエン・クウ・チン通り (đường Nguyễn Cư Trinh) に位置している。[現在のナム・タン聖室に移ったのは、1948年である。]

筆者はカウ・コォー派の考えは現在のナム・タン聖室に継承されたことを否定するものではないが、カウ・コォー・タム・クワン聖会にも継承されたのみならずバン・チン・ダオをはじめとする他の宗派にも継承されたものと考えている。また、本稿では紙数の関係でジュネー

ブ協定以前までの同聖会の歴史を考えるものとする。

## (1) 前史

PBHによれば、「中部地区における大道 (Đại Đạo) の教えを普く済度するための広報活動は、実際は1927年からカウ・コォー聖室のヴウオン・クワン・キイ、ドォアン・ヴァン・バン、レ・ダイ・ルゥアン (Lê Đại Luân), グウエン・フウ・フウオン (Nguyễn Hữu Phương) らによって行われていた。しかし、その当時は保護政權は中部地区におけるカオダイ教の布教を禁止しており、戊寅の年 (1938) 2月15日まで禁教は続き、同年になって初めてファン・ギ (Phan Nghi) 氏を正会長とする中央聖室 (Thánh Thất Trung Ương) にあって合法とされ、中部ヴェトナム中央聖会 (Hội Thánh Trung Ương Trung Việt) と称せられ、これが現在のカウ・コォー・タム・クワン聖会の前身であった。」とあるが、その時期のカウ・コォー派には二派あったことが「ホアン・ミン」と「略史」には記されている。すなわち、「1926年、タイニンに大いなる教え (Đại Đạo) が開かれた後、中部地域にもカオダイの多くの宗派が伝道された。その宗派の中で、カオダイ・カウ・コォー派には正しくは二つのグループがあった。

第一のグループ：グウエン・フウ・フウオンが、サイゴンのカウ・コォー聖室でカオダイ教に入門し、ビン・ディンに戻って、レ・カン (Lê Căn), ファム・チン (Phạm Trinh), ファム・ヴィ (Phạm Vỹ), ファム・ダット (Phạm Đạt), ヴォ・トゥック・スウオン (Võ Tứ Xương), ダオ・ヒエン (Đào Hiền), グウエン・ドォアン (Nguyễn Đoan) ……ら各氏に教えを伝えたグループである。その後一定の時間が経過した後に、グウエン・ク (Nguyễn Cư), ブイ・ズ (Bùi Dư), グウエン・フン (Nguyễn Phụng), チャン・ディン・キン (Trần Đình Kinh), チャン・フウ (Trần Phú), ファン・クワン (Phan Quang), レ・ズ (Lê Dư), ファム・



ム ア (Phạm Mua), ファン・カム (Phan Khâm), グウエン・タオ (Nguyễn Tạo), ドオ・タン・ビン (Đỗ Thanh Bình), レエ・コン・カン (Lê Công Cẩn) . . . のような人達が教えに加入した。教えに従う多くの人達を受け入れた後、ビン・ディン省ダップ・ダ、タン・リエム村 (thôn Thanh Liêm, Đập Đá, Bình Định) に、ホ (họ)<sup>(21)</sup> に集う信者が一緒にタン・リエム聖室 (Thánh thất Thanh Liêm) を建設し、カオダイ (Đức Cao Đài) を祀る場所とした。

第二のグループは、1927年、タム・クワン (Tam Quan) においては常にはティエップ師 (thầy Thiếp) と呼ばれていたグウエン・フウ・ハオ (Nguyễn Hữu Hào) もサイゴンのカウ・コォー聖室においてカオダイの教えに入門し、タム・クワンに戻って教えを伝えた。ハオは周辺地域の人々の病気を治したり修行するために、タム・クワン社チュオン・スウアン (Trường Xuân) 村の山上に小さな仏寺を建てた。ハオの病を治す効験あらたかな噂を聞いて、多くの人がそこを探し来て、学びを求め、病を治そうとした。1927～1930年のある時期にあって、氏はファン・ギ (Phan Nghi), ファン・カン (Phan Khánh), チャン・チャウ (Trần Châu), ファン・ボイ (Phan Bồi), グウエン・ディン・ディー (Nguyễn Đình Dinh), レエ・ホアイ・マン (Lê Hoài Mẫn), グウエン・フン・ホアン (Nguyễn Phụng Hoàng), チャン・ダン・ヒン (Trần Đăng Hình) . . . のような若干の人たちのために教えを伝えた。」とある。グウエン・フウ・フウオンにしろグウエン・フウ・ハオにしろ共にサイゴンのカウ・コォー聖室に学び中部に戻って教えを伝えたものである。この二派の統合過程はそれほど困難を抱えてはいなかった。「ホアン・ミン」と「略史」には、

「一定の時間の後、グウエン・フウ・フウオンとグウエン・フウ・ハオの教えの二派は、互いに一体化することを探り、教えの建設に共に心を配ることに協力することとした。その時、第二のタム・クワン・グループに属するファ

ン・ボイ氏の家には祖先を祀るための仏寺があり、人々は通常はタム・クワンにおけるバイ・リン氏の寺 (Chùa ông Bái Linh) と称しており、その寺を教えのためにカオダイ聖室 (Thánh Thất Cao Đài) とすることを自ら願い出て献上した。(バイ (Bái) は、寺監あるいは寺の管理人を意味し、リン (Linh) はファン・ボイ氏の子供の名前である。)

1932～1933年には、中部地域において教えに従う人数がかなり大勢になり、信徒の信仰への願いに応えるために、何人かがそこでの教えの公開や実際に適合した方法を探すようになった。教えの宗派の指導的地位にある人の一人でもあるタム・クワン・グループのファン・ギ氏は南部に入り援助を依頼した。ここに両グループの統合が始まったのである。すなわち、ファン・ギ氏は、レエ・ダイ・ルウアン (Lê Đại Luân), グウエン・ホアン (Nguyễn Hoanh), チャン・カア (Trần Khả), グウエン・フン (Nguyễn Phụng), ズウオン・トン (Dương Thông), フウイン・ディック (Huỳnh Dích), チャン・チャウ (Trần Châu), フン・クワン (Phùng Quyển), ドアン・ヴァン・ゴイ (Đoàn Văn Ngôi), チュオン・ヴァン・ティエン (Trương Văn Thiện) 各氏らのように、タン・ディン聖室 (Thánh thất Tân Định) [現在の、ホー・チ・ミン市 (TP.HCM) 第一区チャン・カン・ユ (Trần Khánh Dư) 53/112に当たる。] で、教えを修めている中部地区を故郷とする人々と会うことができた。レエ・ダイ・ルウアンはファン・ギを助けるためにサイゴンのカウ・コォー聖室まで来て、指導した。ここで、ルウアンはグウエン・ファン・ロン (Nguyễn Phan Long), ドアン・ヴァン・バン, グウエン・ヴァン・トゥオン (Nguyễn Văn Tường), チャン・ヴァン・クウエ (Trần Văn Quế), ヴウオン・クワン・キイ, ファン・チュオン・マン (Phan Trường Mạnh), チャン・テエ・タン (Trần Thế Tân), レエ・ヴァン・サン (Lê Văn Sanh) . . . の蓮華総会に属する各氏と会った。



カウ・コォー聖室は、カオダイ教各派が協力して一つの宗旨で活動するべく何人かの知識人によって立ち上げられた1936年に成立した蓮華総会機関の所在地であった。その運動委員会 (Ban Vận động) には、グウエン・ファン・ロン、チャン・ヴァン・クウエ、グウエン・ヴァン・フン、ファン・チュオン・マン、チュオン・ケ・アン・・・らの各氏が含まれていた。蓮華総会は、カオダイ統一運動に多くの力を尽くしたが、成功しなかった。しかしながら蓮華総会も、中部地区や外国に教えを伝播するような一定の結果を出した。他にも、蓮華総会には内容豊富な月刊紙「大同 (Đại đồng)」と「帰源 (Quy nguyên)」の二紙があり、価値が大きかった。

ルワンがカウ・コォー聖室で蓮華総会の各位と会った後2・3ヶ月して、ヴウオン・クワン・キイはタム・クワンを訪れた。しかし、事件が起きてヴウオン・クワン・キイは直ちに南部に戻らねばならなかった。この状況の前に、レエ・ダイ・ルワンはファン・ギと討論し、教えのために断固として行動することとした。二人は勇敢な50人を選び、カウ・コォー聖室での教えの段階を認める証書を発行し、天眼 (Thiên nhân) の200の形を容認して、1936年陰暦7月15日に道友全体に天眼を厳かに祀ることを決めた。また、政権代表各位を招き、その席で道服 (đạo phục) と教えの経書を用いた。この計画は、ただ当面のみのもので、天眼の数は、(カウ・コォー聖室によって供給された) 20,000以上に上った。戊寅の年 (1937年) 2月15日、太上老君 (Thái Thượng Lão Quân) の記念日に際して、タム・クワンにおいて教えの各派は中部ヴェトナムにおけるカオダイ教の開道礼 (lễ khai đạo) を執り行なった。」とあり、

ビン・ディンとタム・クワンに伝えられたカウ・コォー聖会の教えが1937年2月15日統合を果たしたことが知れる。

## (2) 試練と「信仰の自由」を逆手に取った中部 ヴェトナム統道中央聖会の認可・発展

「ホアン・ミン」と「略史」にはそれまでの弾圧とその中で「信仰の自由」という宗主国フランスの人権上の原則を逆手に取り、フランス本国の人権委員会・議会・世論に訴えてカオダイ教の宗教活動の認可を獲得するまでの試練の様子を記している。すなわち、「開道礼によりカオダイ教は人を救い病気を治す方法と結合して急速に普及し、教えに入る人数も日増しに増え、別の各省にも拡大した。

カオダイ教が急速に発展する以前には、フランス植民地政権と阮朝朝廷は、教えを伝える事を禁止する命令を出し、容赦なく弾圧し、教えの人を捕えては獄に入れ、経書を没収し、全てを破壊し尽くした。天眼を祀ることもできず、違反すると罰金は10ドン (đồng) から60ドンまで科せられ、懲役は6ヶ月から5年間とされた。

この件によりカウ・コォー・カオダイの信徒が集まりレエ・ダイ・ルワンに手紙を出して、蓮華総会の機関によってサイゴン人権会議 (Hội Nhân quyền Sài Gòn) とフランス人権委員会 (Hội đồng Nhân quyền Pháp) に、信仰の自由な活動をカオダイ教に許すことを交渉するよう願う陳情書を送り、交渉を重ねることとなった。同時にフランスのレテル郡 (quận Rethel) のガビエル・ゴブロール (Gabriel Gobrol) <sup>(22)</sup> に手紙を出し、フランス議会に交渉することを要求した。ゴブロールはこの件をフランスの新聞の前面にのせた。フランス議会 (Nghị trường Pháp) ではムーテ代議士 (Nghị sỹ Moutet) が調査を開始しインドシナ政府 (Chính phủ Đông Dương) に通知書を送るよう交渉した。また、フランス人権委員会も調査を開始するよう中部ヴェトナムに通知書を送った。それに続いて植民地大臣 (Tổng trưởng Bộ Thuộc địa) グールジェ・マンデル (Georges Mandel) はインドシナ政府に、カオダイ教に宗教信仰の自由と20人以下の集会を許す通知書を出した。

1937年、ビン・ディン (Bình Định), クワン・

ガイ (Quảng Ngãi), フー・イエ (Phú Yên), コン・トゥム (Kon Tum), プレイク (Pleiku), カイン・ホア (Khánh Hoà) の中部ヴェトナム 6 省における教えの代表 12 人 (ファン・ギ (Phan Nghi), チャン・チュオン (Trần Chương), チャン・ズイ・ザン (Trần Duy Dẫn), チュオン・ニャン (Trương Nhân), チャン・チャウ (Trần Châu), ファム・ルク (Phạm Lục), レエ・カン (Lê Cẩn), ファン・カン (Phan Khánh), ファム・ダット (Phạm Đạt), グウエン・フン・ホアン (Nguyễn Phụng Hoàng), グウエン・ディン・ディー (Nguyễn Đình Đình), チャン・ダン・ヒン (Trần Đăng Hình)) は、ハノイ全権 (Toàn quyền Hà Nội), インドシナ連邦安南保護領安南フエ統監 (Khâm sứ Huế), 安南クイ・ニョン公使 (Công sứ Quy Nhơn), ボン・ソン知府 (Tri phủ Bình Sơn) といった政府当局に陳情書を送って、タム・クワンの中央聖室 (Thánh thất Trung ương) の合法化を願い出た。この後カオダイ大道三期普度の開設式典 (lễ Hoát khai) を開催し、ファン・ボイ氏の家に聖室を設け、戊寅の年 (1937 年) 2 月 15 日にファン・ギイを正会長として中部ヴェトナム統道 (Thống đạo Trung Việt) の中央聖室とした。蓮華総会からはファン・チュオン・マン (Phan Trường Mạnh) とレエ・ヴァン・サン (Lê Văn Sang) の二氏が出席し、『弘開大道 (Hoàng khai Đại Đạo)』の 4 字が刺繍された振り物を授与した。この方法で各地方における指導者たちも、順繰りに聖室の合法化を求めて行った。」とあり、1937 年 2 月の中部ヴェトナム統道の開道の裏には、蓮華総会と組んでフランス本国へ信仰の自由を求めるといった交渉の秘策があり、その時フランス国籍を取得していたヴウオン・クワン・キイがフランス語やその社会的な人脈を利用して活躍したがゆえに、今でもキイはカウ・コォー・タム・クワン聖会の先輩として敬愛されていると思う。ただ、聖室の合法化は長くは続かなかった。その過程を「ホアン・ミン」と「略史」で見ると、「1939 年には、

中央聖室の統道には、次の 19 の聖室が含まれ、信徒総数は 58000 人を超えていた。すなわち、ビン・ディン省にはフン・ソン (Phụng Sơn), ミイ・ナム (Mỹ Nam), クワン・ズウオン (Quan Rườn) すなわち現在のトゥアン・アン (Thuận An), ミイ・トォ (Mỹ Tho), ロン・ホア (Long Hoà), タン・ロン (Tăng Long), タン・リエム (Thanh Liêm), トウイ・フウオック (Tuy Phước), ホアイ・アン (Hoài Ân)。フウ・イエ (Phú Yên) 省におけるアン・ギイエップ (An Nghiệp)。カイン・ホア省ニャ・チャン (Nha Trang) におけるタン・フン (Tân Hưng) ・リエム・タン (Liên Thành)。クワン・ガイ省におけるメエ・ソン (Mễ Sơn), ソン・ヴェ (Sông Vê), ギア・ラップ (Nghĩa Lập), ミイ・ロン (Mỹ Long), ビン・ソン (Bình Sơn), フウオック・ティエン (Phước Thiển), リイ・ソン (Lý Sơn), サア・フウイン (Sa Huỳnh) における 19 の聖室である。

カウ・コォー聖室の活動は 1943 年までは順調に推移した。しかし、1943 年になって阮朝政府は中部ヴェトナムにおける教えの指導者たちを逮捕するよう命令を出した。逮捕された方々の中には次の各氏が含まれていた。グウエン・フン・ホアン (Nguyễn Phụng Hoàng), グウエン・ディン・ディー, グウエン・フウ・クウー, グウエン・フウ・トォアン, グウエン・フウ・タン, ヴォ・カット (Võ Cát), マイ・スウアン・フウオン (Mai Xuân Phương), レエ・ニイ, フウイン・カム (Huỳnh Khâm), レエ・カン (Lê Cẩn), ファム・ダット (Phạm Đạt), ダオ・ヒエン (Đào Hiền), ファン・ゴック・ミイ (Phan Ngọc Mỹ), ヴォ・カック・クワン (Võ Khắc Quang), レエ・チョン・ニョ (Lê Chơn Nho), ヴォ・トゥオン・テ (Võ Thượng Tê), ヴォ・カック・カン (Võ Khắc Cang), グウエン・ニャト・タン (Nguyễn Nhật Tân), ヴォ・ホア (Võ Hoà) (フウ・ラム (Phú Lâm)) の各氏は 1945 年 2 月までクイ・ニョン刑務所 (Nhà lao Quy Nhơn) に収監されたが、その後赦された。

ただファン・ギィ氏は、ダック・ラック (Đắc Lắc) に流刑にされた。ヴォ・ホア氏は刑務所で獄死し、レエ・カイ氏は逃亡した。」信仰の自由を人権として認定しているのは宗主国フランスであり、阮朝ではない。ましてやインドシナにおいても1941年の南部仏印進駐後における政治状況が厳しくなり、中部のみならずカオダイ教への弾圧は拡大していた<sup>(23)</sup>。ジュネーブ協定後、ヴェトナムは南北二つに分かれたため、カオダイ・カウ・コォー・タム・クワンンの職色・信徒も、個々の自宅に立ち戻り、自宅を聖室として教えの基礎をまた開いた。1954年の末に、最初に再建された聖室はグウエン・フウ・タン (Nguyễn Hữu Tấn) の家に置かれたミィ・トォ聖室であった。後に信徒が多く集まりすぎたため、ミィ・トォ、ミィ・クワン (Mỹ Quang)、ニョン・フウオン (Nhơn Hương) の3つの聖室に分かれたと「ホアン・ミン」や「略史」にはあるが、ジュネーブ協定以降の歴史については後致を俟つ。

## おわりに

ヴウオン・クワン・キィは高級官僚として南圻総督府商務局ではゴォ・ヴァン・チェウと同窓であり、姪ヴウオン・ティ・レエとの関わりから第二グループ＝外教公伝の成員となった。しかし、李教宗の名を以てタイニン派から追放にあいながらも、李教宗も許さざるをえない影響力を持った。タイニン派にもカウ・コォー派にも大きな影響を及ぼしたが、中でも内教心伝と外教公伝の両派との人脈から第一・第二グループの統合に主導的な役割を果たした。それにもかかわらず、その後のタイニン聖座の代表者を独占した第二グループによる教団儀式の統合化のための『大壇小壇儀礼』には従わないよう指示を出し、サイゴンにおけるカオダイ知識人の大部分を集めて、分かれてカウ・コォー派を立て、カウ・コォー聖室を同派の機関所在地とした。教団開設時の第一・第二グループの確執が「最後の干諫」には表現されており、キィ

は第二グループに属しながら必ずしも外教公伝に組せず、カウ・コォー派独自の統合的なカオダイの在り方を蓮華総会などを通して実現しようとした。蓮華総会を通じてフランス本国の人権委員会や議会などとの交渉をも指導し、中部ヴェトナム統道中央聖会の合法化と設立にも指導力を発揮した。バン・チン・ダオの尚配師にも任ぜられ、支派を超えた指導力を持った点にキィの特色があると言えるものと思う。

なお、現在のカウ・コォー・タム・クワン聖会は、2000年4月から国家に活動することを許され、ビン・ディン省ホアイ・ニョン (Hoài Nhơn) 県タム・クワン (Tam Quan) 市鎮の地にある聖座を同派の住所とし、2007年現在、31,077人の信徒、237人の職色、206人の職事 (chức việc) がおり、23の祭祀のための基盤となる施設である聖室があるが、その中の1つの聖室は2007年段階では、未だに国家の公認を得ていないものの、中部ヴェトナム南部沿海部 (duyên hải Nam Trung Bộ) の各省やタイ・グウエン (Tây Nguyên) やビン・ディン (Bình Định)、クワン・ガイ (Quảng Ngãi)、フウ・イエ (Phú Yên)、カイン・ホア (Khánh Hoà)、ジャ・ライ (Gia Lai)、コン・トゥム (Kon Tum)、ラム・ドォン (Lâm Đồng) の幾つかの省に専ら集中して置かれている。

## <注>

- (1) 高津 茂 (2010) 「チャン・ダオ・クワンとカオ・ダイ・ミン・チョン・ダオの形成過程」, 東洋大学 アジア文化研究所『研究年報』, 第45号, 100-116頁

高津 茂 (2011) 「グウエン・ゴック・トゥオンとカオダイ・バン・チン・ダオの成立をめぐって」, 東洋大学 アジア文化研究所『研究年報』, 第46号, 136-151頁

高津 茂 (2012-1) 「カオダイ・ティエン・ティエン (先天) 派の創設過程」, 東洋大学 アジア文化研究所『研究年報』, 第47号, 176-197頁

高津 茂 (2012-2) 「カオダイ教伝教聖会の歴

史と共生実践」,『共生科学』,第3巻,75-82頁

高津 茂 (2013-1) 「カオダイ教真理聖会の聖室について」, 東洋大学 アジア文化研究所『研究年報』, 第48号,

高津 茂「グウエン・ヴァン・カとカオダイ真理聖会の創設の歴史」, 星槎大学紀要『共生科学研究』, No.9, 91-112頁

高津 茂 (2014) 「カオダイ白衣連団真理聖会の歴史」, 星槎大学紀要『共生科学研究』 No.10, 85-100頁

- (2) Đồng Tân ; Lịch Sử Cao Đài, Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Phần Vô Vi, 1967, Cao Hiền Xuất Bản, [以後, ドン・タン (1967) と略記。]; pp.190-193
- (3) ドン・タン (1967) & Đồng Tân ; Lịch Sử Cao Đài, Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Phần Phổ Độ 1926-1937, 1972, Cao Hiền Xuất Bản [以後, ドン・タン (1972) と略記。]
- (4) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : LỊCH SỬ ĐẠO CAO ĐÀI, Quyển 1 ; KHAI ĐẠO Từ Khởi Nguyên Đến Khai Minh, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2005, [以後, CQPTGLDD 1 と略記。] & Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : LỊCH SỬ ĐẠO CAO ĐÀI, Quyển II, TUYÊN ĐẠO Từ Khai Minh Đến Chia Chi Phái (1926-1938), Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2008 [以後, CQPTGLDD 2 と略記。]
- (5) Trung Tâm Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn Quốc Gia, Viện Nghiên Cứu Tôn Giáo ; BƯỚC ĐẦU TÌM HIỂU ĐẠO CAO ĐÀI, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội, 1995 [以後, VNCTG と略]
- (6) 枚挙に暇がないので1例を挙げる。Phạm Bích Hợp ; Người Nam Bộ và Tôn Giáo Bản Địa, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2007 [以後, PBH と略]
- (7) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ : LƯỢC SỬ Hội Thánh Cao Đài Cầu Kho Tam Quan (Lưu hành nội bộ) [以後『略史』と略記。]
- (8) Hoàng Minh ; Cao Đài Cầu Kho Tam Quan lịch Sử hình thành và phát triển, Tạp chí Cao Đài số [以後, 「ホアン・ミン」と略記。]
- (9) Werner Jayne Susan ; THE CAO DAI : The

Politics of A Vietnamese Syncretic Religious Movement, Cornell University, Degree Date 1976, p.575

なお, ミン・ティエン (明善) 派については, 高津 茂 (2012) 「ヴェトナム南部メコン・デルタにおける五支明道とカオダイ教」『星槎大学紀要『共生科学研究』, No.8, pp.35-37 参照

- (10) CQPTGLDD 1 ; , p.291 「大道開前28位紀要集」 (Tập Kỷ yếu 28 vị Tiền khai Đại Đạo) の8番目に紹介されている。

- (11) 蓮華総会については, CQPTGLDD 2, pp.579-595 参照, 以下はその概要。

1936年, グウエン・ファン・ロン (Nguyễn Phan Long), ドオアン・ヴァン・バン, チャン・クワン・ギィエム (Trần Quang Nghiêm), チャン・ヴァン・クエの各氏が, 各支派を和合させるための竜雲会 (hội Long Vân) 運動を組織するために, 蓮華総会を互いに同意して打ち立てた。蓮華総会の組織は, 12の竜雲会を得たものの, 各支派は和合して礼拝しただけで, 1945年になって散会した。

- (12) <http://caodaibanchinhdao.org/forum/showthread.php?t=1146> 参照
- (13) カオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư) は鉄道・公共労働局の書記としてサイゴンで勤務し, カオダイ教の協天台の高僧となり, ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) は関税・専売局の書記としてサイゴンで勤務し, カオダイ教の中核である護法としてタイニン派代表を1934-56年の間務め, カオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang) は関税・専売局の書記としてサイゴンで勤務し, カオダイ教協天台の高僧尚生となり, タックの後, タイニン派代表を1956-71年まで務めた。
- (14) カオダイ辞典の「七娘」の記述によると, カオダイ教の機筆の歴史の中では, 最初にサイ・バン・グルーに行きついた仙女であり, ヴェトナムにあっては, 七娘という仙女が人間に生まれ変わってこの世に降ったのが, チョ・ロンのヴウオン家の家庭に入って生まれ変わって誕生したのが1900年1月8日に生まれたヴウオン・



ヴウオン・クワン・キィ (Vương Quan Kỳ) とカオダイ・カウ・コォー聖室(Thánh Thất Cầu Kho)の形成過程

ティ・レエとある。

- (15) CQPTGLDD 1, p.425の脚注によれば、その後のヴウオン・タン・チは、レエ・ミン・カアの次男で法名ディア・リン・ティンであるレエ・ヴァン・チャンと家庭を持った。夫妻はともにミン・タン三教殿で教えを修めた。チの法名はタン・ズウオンであった。チは1980年6月21日に他界し、球技場近くのトゥ・ドゥックの家族の墓に葬られた。
- (16) 教宗レエ・ヴァン・チュン (1876-1934) のこと。  
<https://sites.google.com/site/thienchaucom/-/tiou-su-dhuc-quyen-giao-to-ng-thuong-trung-nhu>
- (17) CQPTGLDD 2. pp.114-116
- (18) CQPTGLDD 2. pp.118-120
- (19) CQPTGLDD 2. では、論拠として Chương Trình Minh Chon Lý, 1932, trang 29 を挙げている
- (20) 高津 茂 (2015) 「カオダイ教におけるフォ・ロアンとサイバン —— カオダイ教形成過程におけるサイ・バンを中心として ——」, 京都大学人文科学研究所『人文学報』 第108号, 127-141頁
- (21) ホについては、『新律』第16条 参照  
高津 茂 (1986) 「カオダイ教の『新律』について ——カオダイ教聖典の考察——」, 立教大学史学会『史苑』 第45巻第1号 (通巻134号), 56-72頁

(22) Gabriel Gobron (1895-1941) のことと思われる。

(23) 高津 茂 (2013) 「両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり (上) ——『復国時期1941-1946におけるカオダイ教の歴史』を中心として——」, 学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』



2012年2月7日 カウ・コォー・タム・クワン聖会 中央聖室 外観 筆者撮影



2012年2月7日 カウ・コォー・タム・クワン聖会 中央聖室 外観 筆者撮影



2012年2月7日 カウ・コォー・タム・クワン聖会 中央聖室 内観 筆者撮影





2012年2月7日 カウ・コー・タム・クワン  
聖会 中央聖室 職色達と 筆者撮影



2012年2月7日 カウ・コー・タム・クワン  
聖会 看板「大道三期普度 カオ・ダイ・カ  
ウ・コー聖会」と記され、タム・クワンとは  
付記されていない。筆者撮影

第15号, 419-460頁

高津 茂 (2014) 「両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり (下) —『復国時期1941-1946におけるカオダイ教の歴史』を中心として—」, 学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』第16号, 432-466頁

(客員研究員)